

仙林寺だより

NO. 66
編集・発行
松田正貴

行事報告

「寿餅」

裕好さんのご修行も四ヶ月を過ぎ、道場で初めてのお正月を迎えました。お寺での年末年始は、すず払い、除夜の鐘、搗餅(餅つき)、修正会(三朝祈祷)と様々な行持が続きます。



その中で、特に師僧様の健康や長寿また仏道精進をお祈りするのが「寿餅諷経(じゅびょうふぎん)」です。正月の三が日、床の間に龍天軸(仏法の守り神)を掛け、袈裟行李(修行の必需品入れ)を置き、また自ら搗いた餅をお供えし、読経焼香をつとめます。その餅を小さくひし形に切つたものを包みに入れ、年賀の挨拶文と併せて師僧に贈るしきたりがあります。その様なわけで、弟子である裕好さんから寿餅可漏が師寮寺院に届きました。寿餅は有難く拝受し、早速床の間にお供えいたしました。伝統的なしきたりを通してお弟子さんの精進弁道の様子がうかがわれます。正月早々嬉しいご挨拶を頂きました。

第三教区檀信徒研修会

一月二十五日、伊達町光台寺にて開催。石川和一様、佐藤辰雄様にご参加頂きました。坐禅の体験、般若心経の法話がありました。

仙林寺檀信徒総会

三十日、総会、新年会を開催、七十名の世話人の内六十名の参加を頂きました。十八年度決算報告、十九年度の予算を審議し、満場一致で可決されました。

白木蓮がとんだ受難

多くの参拝者の目を楽しませてくれた境内の白木蓮が、昨年の暮れ事故に遭い重症、手当ての甲斐もなく黄泉へ旅立ちました。享年およそ三十年の生涯でした。ご冥福をお祈り致しまして草木塔の一木へと名を連ねます。



さて、ぼっかりと空いてしまつた席を埋めるようにご縁は突然やつてきます。四十九日を待たずに鎮座いただくのは若干気が引けましたが、これもご縁です。新たな庭の彩りは、香りも芳しい「蠟梅(ろうばい)」です。

す。その名の通り蠟細工のような美しい黄色い花、そして素晴らしい香りは、一気に春を運んできてくれるかのようです。花にもよおされて季節がやってくる、花は無心にして蝶を招き、蝶は無心にして花を尋ぬ」という良寛様の詩が思い出されます。観音様のお傍で、人の目を楽しませよう、良い香りを嗅がせてあげようなどというはからいのない無心な蠟梅の姿に、かえって思いを巡らしてしまう自分があります。山川草木悉有仏性。折角咲いた花の芽を啄ばみ散りじりにしてしまう鶴にも仏性はあるようです。合掌。

「禅をきく会」

二月一日、仙台楽楽ホールにて「第九十三回禅をきく会」が開催されました。愛知専門尼僧堂 青山俊董堂長をお迎えして、禅の悟りにいたるまでの様子を表す「十牛図」の話をお聞きしました。当日は四、五百はあるうかと思われる席が満席、老師の人気の高さ

が伺われます。ご存じない方に少し説明させて頂きますが、老師などと聞くと男性の僧侶というイメージがあるかと思いますが、青山老師は実は女性のお坊さんで、女性出家者を対象とする修行道場の堂長さまでです。

講演のはじまりはやはり女性らしくまず自作の歌を一句「くさぐさの 葉末にやどる 白露の 一つ一つに 月影の澄む」今年の勅題「月」に因むお歌だそうです。およそ三十八万キロの彼方に輝くあの月も、この私の手許にある草葉に宿る白露にまでその影を落とす。しかも草葉であり、一つ一つであるところに、誰もが持つている澄んだ心という悟りの気付きを促されているかのようです。

さて、お話は「十牛図」。牛飼いが牛に出会って飼いなすまでを前五つの図で表し、後の五つの図では牛を飼いなす、ではそれからどうするのかという心持ちを禅の境涯に併せ思料してゆくものです。今回の講演は前五つ、それぞれ尋牛、見跡、見牛、得牛、牧牛。

青山老師はまず、自分というものを自己と自我に分け、それぞれ自我を牛飼いに、自己を牛に例えます。自我とは拘りの心に覆われた自分、自己とは拘りを離れた本来の自分です。自我によりふらふらしたりよるよるしながらの人生修行ですが、それを支える力となるものが「四勝力」であると仰います。因力(授かり)、作意力(やる気)、善友力(真理への志を同じくし、結ばれている友)、資糧力(チャンスをつかむ)これらの力を元として、また牛に例えた本来の自己にもよおされて、飼いなす牛の図へと導かれてゆくものでしょう。最後に昭和の禅哲 澤木興道老師の言葉を引用して「生活の自分を仏様に引張られて行くことじゃ」お後がよろしいようで。来年の十牛図後半のお話を楽しみにお開きとなりました。善友力に引張られての講演会、有意義な二時間でした。

ひとこと 「月面仏」

今年の宮中歌会始のお題は「月」だそう
です。「月」は誰にでも分け隔てなくその
光を届けるところから、禅ではしばしば
お悟りの様子に例えられます。そこでまず
思い出されるのは道元禅師様の和歌集『傘
松道詠』の中にある「濁りなき 心の水に
栖む月は 波もくだけて 光とぞなる」そ
して「しずかなる 心の中(うち)にす
む月は 波もくだけて 光とぞなる」先
うたの詞書が「坐禅」後のうたが「坐禅工
夫の意を詠ず」とあります。坐禅工夫と
は、いろいろと心を砕き仏の示された教え
坐禅に親しむ事を言います。心騒がず安ら
かに坐禅をしていると、天真に輝く月の光
(お悟りの心)が心に住まいして遂にはそ
の光そのものになってくる。また二つの
うたに共通する「波もくだけて光とぞなる」
とは、海面に映る月影は一つであつても、
そこに碎ける飛沫、つまりあれこれと思案
をめぐらして坐禅工夫する心のうちに、そ
の境涯の深まりに応じた一筋の光、光明を
映し出してくれるとの意を見ることができ
ます。更にまた『正法眼蔵』現成公案の
中に、「人が悟りを得るのは、水に月が宿る
ようなもので、その月は、ほんの小さな草
の露にも宿れば一滴の水にも宿る。悟りが
人をそこなわないのは、月が水をそこなわ
ないのとおなじである」と。また「人の妄
念が悟りを妨げないのは、あたかも露や一
滴の水が天上の月を妨げないのと同様であ
る」妄念の起滅する中に悟りの月影をその
まま映すというような事が示されておりま
す。どうでしょう、学道の人として大いに
励まされるお言葉ではないでしょうか。

ところで、達磨様から数えて八代目の禅
師様に馬祖道一禅師様がおられます。最期
の時をむかえようとすると、弟子より最後

の教えを所望されます。応えて曰く、「にち
めんぶつ日面仏・がちめんぶつ月面仏」
『仏名経』の中に「日面仏の寿命は千八
百歳、月面仏は一日一夜」とあるそうです。
馬祖禅師は死に臨むにあたり、不老の身の
まま、言えば毎晩死んでいようなものとの
お示しだったのでしょうか、命の長い仏、
短い仏、命の長短はあるけれどもどちらも
生を全うする仏として敬う、敬うとは、い
のちを大切に生き切る行いにつながるもの
と思えます。機根の大小深淺を超えて宿
る仏の心、寿命の長短を超えた仏の命、仏
の法(おしえ)の中で生かされているわが
身を感じます。歌のお題は変わつても、
行き着く真理(おしえ)はただ一つ。春の
訪れと共に、自然にもよおされるいのちを
思う時節です。

ひとこと 「鬼も内」

「福は内、鬼は外」、最近では鬼さんにも
めつたに会うこともないよう、豆まきの
声もやや遠慮気味の
ご時世です。さて、
豆まきと言えれば節分
ですが、現在行われて
いる節分の行事は立
春を正月としていた
時代の大晦日の行事
だそうです。新しい年
を迎えるために邪気
を払う中国の行事、追
儼式(ついなしき)鬼
やらいの儀式が元
なつたといわれます。



また、この鬼も古くはインドの飢餓にあえ
ぐ亡者「餓鬼」(プレータ)、が起源。「ガキ
の使いじゃない」「このガキが！」の餓鬼が、
中国の鬼「死者と混濁、お盆にお寺で行わ
れる法要」「施餓鬼(せがき)」「食(じき)」

会(え)は飢餓に喘ぐ死者に、おんじき飲
食を施すことで、鬼「祖霊と祀りあげる供
養とも考えられます」。

この様に見てみますと日本の鬼さんは三
種類に分類できそうです。つまり、秋田の
なまはげのような異形者に姿を変え、多く
の人々に幸せをはこんでくる祖霊、そして
季節の変わり目の邪気や、作物に害を与え
る虫や鳥など災いをもたらす対象としての
鬼、また一歩進んで、私達人間の心の中に
潜む鬼です。「泣いた赤鬼」という童話
があります。人間とどうしても仲良くした
かった赤鬼が青鬼の知恵と自己犠牲によつ
て遂には円満な関係を作ります。しかし物
語の最後には、犠牲を払った青鬼の置き手
紙を見て、本当の友情や自分の身勝手さを
知り涙するというストーリーでした。「鬼の
目に涙」などと言いますが、まさに青鬼君、
赤鬼君の姿を見るにつけ、心に同居する善
悪の鬼とのお付き合いには考えさせられま
す。最後に、鬼に扮する全国の幼稚園の
先生方は毎年ご苦労様な事と思えますが、
鬼さんゴレンジャーにも役割があつた事を
ご存知でしょうか？

赤鬼： 貪りの心を象徴し、豆をぶつける
ことで自分の中にある悪い心を取り除く。

青鬼： 嗔恚(しんい)「怒りの心」を起こ
さないよう心の鬼に豆をぶつけます。

黄鬼： 我執にとらわれず公平な判断が
できる心をお願いします。

緑鬼： 不摂生の自分を顧みて、心と体を
健康に保つことを自分に言い聞かせます。

黒鬼： 愚痴、愚かさを意味します。不平
不満の心を正します。

一人で五役は忙しすぎる私です。